

令和7年度愛鳥週間ポスターコンクール 審査講評

小学校 22 校、中学校 23 校、高校 5 校から 136 点が出品されました。小学生の作品には、描きたい野鳥や鳥のいる場面を大胆にとらえ、いきいきと描かれている作品がたくさんありました。図鑑等でその野鳥をじっくりと見つめ、その姿や形、色を自分なりによく知ろうとして描いたのがどの作品からも感じ取られました。中でも、山形県知事賞では、水辺で水しぶきがあがるくらいに大きな羽をはばたかせているシロサギの様子が描かれ、そこにいきいきと生きている姿が想像されました。

中学・高校生の作品は、表現のレベルが高まり、そこに野鳥や鳥がいるということだけでなく、そこに生きている場面や一瞬をとらえ、ひとつひとつの作品に描き方の工夫やこだわりが見られました。中学生の環境省東北地方環境事務所長賞では、シジュウカラが実をつつき、会話しているかのような自然な姿が描かれています。澄み切った冬の冷たい空気感がはっきりとした色彩から感じられます。高校生の山形県知事賞では、俯瞰でコムクドリと景色を描いています。山形県らしい田んぼアートもモチーフにし、その中に愛鳥週間の文字を取り入れた構図も秀逸です。

今回の審査全体を通じて感じたことは、どの作品からも野鳥や鳥を自分なりに知ろうと興味関心をもって描いた姿が想像できました。描きながら感情として湧いてきた野鳥たちへの愛情や思いが、細やかな描写や鮮やかな色彩に表現されていました。また、図鑑や画像の野鳥たちが自然の中で、いきいきと生きる姿を想像を巡らせながら描いたことも伝わりました。はばたきなどの動きを捉え、大胆な構図でよりダイナミックに表現したり、視点を工夫した構図で鳥たちの存在を強調して表現したりしていました。

今回の作品から野鳥たちのいきいきと生きている姿、かわいらしさや美しさ、力強い姿がたくさんみられました。審査をしている専門家の方々の描かれた鳥たちを見る視点もとても興味深く、もっと野鳥について知りたいと感じました。今回応募されたみなさんも描くことをきっかけに野鳥たちや自然への興味や愛情が生まれたことと思います。近年、ICT 技術の発達により、子どもたちが自然の景色やそこに生きる生き物に目を向ける、図鑑を開く、描画材料を使って絵を描くという機会も以前より少なくなっているように感じます。しかし、今回の応募された作品を審査しながら、心の目で対象を見つめて描くという表現活動の良さを改めて感じました。また、このようなポスター制作をきっかけにして、自分たちの周りの自然や環境に目を向けて思いを馳せ、これからも私たちの住む自然豊かな山形県を誇りに思い、大切にしたいという思いが育まれていってほしいと思います。